日本の起死回生策を説く

富士常葉大付属風土工学研究所 閉所を記念し講演

富士常葉大学付属風土工学研究所が11年間の活動に終止符を打ち、3月末に閉所したのを記念し、研究所長を務めた工学博士の竹林征三名誉教授が22日、同大構内で「日本文明・崩壊の岐路―環境防災と風土工学の思想」と題して講演した。竹林名誉教授は、今回の東日本大震災を神からの日本人に対する警告ととらえ、岐路に立たされた日本の起死回生策や固有の風土、文化への回帰などについて説いた。

講演する竹林名誉教授

これまでの土木工学は、より利便性を追求した形での国土形成に向け、自然災害に強い河川改修や砂防、海岸事業など、防災に大きな成果を挙げてきたが、地域の風土文化形成の機能が忘れられ、土木施設の基準化、標準化により、個性のない町や地域が形成されてきた。

風土工学は、地域の風土と文化を結び付ける方法として、竹林名誉教授が建設省を退官後、新しい学問体系として初めて構築したもので、2000年4月、同大学が開校したのに合わせ、徳山明初代学長の依頼により世界初の研究所を開設した。

同年5月に開かれた開設記念シンポジウムには、フランスで風土学の領野を開拓し、独自の画期的な理論を構築したオギュスタン・ベルク氏や河川工学の第一人者・高橋裕氏、土木計画学の先覚者・五十嵐日出夫氏らそうそうたるメンバーが集まった。

富士学会の設立や風土工学の普及啓発のための講演会、シンポジウムを毎年開催。日本感性工学会の中に研究部会を立ち上げ、研究発表会を開いたり、論文、著作など積極的に執筆活動を続け、科学技術庁長官賞や建設大臣賞、国土交通大臣賞などを受賞した。

任期満了により竹林名誉教授は大学を去り、後継者がいないため、11年間の研究所活動に終止符が打たれた。

今回の東日本大震災について竹林名誉教授は「マスコミはあまり報道しないが、岩手県譜代村の河口付近に水門が設けられていたおかげで、死者が発生しなかった。今回の津波の被害は凄まじかったが、三陸沖には、過去に何度も津波が押し寄せており、あらかじめ防波堤が設けられていたため、被害がある程度食い止められた。防波堤がなければ、さらに被害は拡大していただろう。防波堤が何の役にもたたなかったとの報道があったが、備えあれば、憂いが少ないのも事実。日本三景の松島も、島々で津波をブロックし、その先の被害を少なくした」と、既存の施設の効果をある程度評価し、日本の技術に自信を持つよう訴えた。

原子力発電所事故についても「福島第1は施設が古かったり、非常電源の位置が悪かったことも重なってやられてしまったが、第2と女川はセーフだった。ほんのちょっとの差だったと思われる。もし持ちこたえたら、かえって世界中からよく巨大地震や津波に持ちこたえたと賞賛されたかもしれない」と述べたほか、原子力をなくした場合、日本の電力自給率に占める水力、風力、太陽光などの割合は合わせて6％しかないことを指摘。「原子力発電所を作らないに越したことはないが、全電力の30％を占める原子力発電を否定はできない」との見解を示した。

オランダやイギリスに追い抜かれ、リスボン大地震と大津波で人口の3分の1を失い、没落の流れを早めたポルトガルやスペインの例を挙げ、中国に追い抜かれ、今また大地震に見舞われた日本の将来について、「日本を東洋のポルトガルにしてはならない」と警鐘を鳴らした。

竹林名誉教授は、先人が築き上げた、世界に類のない、素晴らしく誇りうる日本文明が再生の鍵とし、レミングが海中に入って自殺するように、日本の文化・文明を衰退させないためには、今こそイエスかノーかの単純思考を捨て、物事の二面性を見抜き、コストや効率一辺倒の経済から脱却すべきとの考えを示した。

震災の教訓としては「神様が、日本人よ、目を覚まし、しっかり反省せよと教えてくれた。100年の長期的な計で日本文化を立て直し、今こそ災い転じて福となすべき」と呼びかけた。

幼児家庭教育学級

受講生募集 28日まで延長

富士宮市教委は、募集中の幼児家庭教育学級受講生の募集期間を28日まで延長する。

市内各公民館、地域学習センターを会場に、知識向上や調理実習、クラフト、体操などを取り入れながら子育てを支援する事業で、毎年多くの父母が参加している。今回は定員に若干名余裕があることから、募集期間を延ばした。

募集しているのは、富丘、南部、富士根北、富士根南、西、柚野の各公民館と、上野、白糸地域学習センター。申し込み、内容の詳細などについての問い合わせは最寄りの公民館、地域学習センターへ。